

これらのいくつかの研究に言及したのは、けっして特殊なものとして列挙したわけではなく、まさに今日の西洋古典学の一般的動向をシンボリックに示すものであるからに他ならない。哲学における批判的・分析的扱いも、歴史における社会史的研究も、文学における精細な感情表現や技法の解明も、古代への視線の取り方としては、明らかに共通の基盤に立っている。

もっとも、古代ギリシア・ローマ像は、長い伝承の歴史の中で、たえず大きく揺れ動いてきている。また、いかなる時代のパースペクティブにおいても、大きな姿を現し、根源的な影響力を及ぼしうるものが古典の古典たる所以でもあるはずである。実際、19世紀以降においても、U. v. Wilamowitz-Moellendorfが *Altertumswissenschaft* すなわち「科学」としての古典学を唱えて一世を風靡すると、つづく時代には、さきほども名前が出た W. Jaeger や H. Fraenkel たちが「よりヒューマニスティックな」古典学へのリアクションを主張する、という具合に、ほとんど世代ごとに異なった古典像を求めてきた。現今の行き方もまた、おそらくそうした揺れ動きの幅の中での一つの局面と見なしうるであろう。それは、当然試みるに値する新たなギリシア・ローマとの関わり方であり、学的なレベルの高まりの中で、われわれはわれわれの古典像を捉えなおすことが、いわば必然的な要請となっているのである。さらに言えば、規範や典型からいったん開放された古代ギリシア・ローマ世界は、その直接的伝統から離れたところに位置するわれわれ日本人にとっては、きわめて関わりやすいものになっている、ということもできよう。

イスラエル学の歴史・現状・未来

関根 清三

イスラエル学という言い方は誤解の余地がありますので、その定義から始めたいと存じます。ここでいうイスラエル学とは、古代イスラエル宗教、およびそれを継承するユダヤ教、そしてユダヤ教の一発展形態である限りにおける初期キリスト教、を対象とする学問のことです。

このうち「ユダヤ教」は、エルサレム第一神殿が破壊

された紀元前6世紀のバビロン捕囚ないしそれからの帰還以降の「初期ユダヤ教」と、その後いったん再興された第二神殿も崩壊の憂き目を見た紀元後1世紀末以降の「後期ユダヤ教」とに分かれます。この後期ユダヤ教は神殿ではなくラビ会議が中心となったという意味で「ラビ的ユダヤ教」と呼ぶ場合もあります。これらのうち古代イスラエル宗教と初期ユダヤ教の生み出した古典が、ユダヤ教の謂ゆる聖書、キリスト教の謂う所の旧約聖書です。私・関根の専門は、この旧約聖書になります。また後期のラビ的ユダヤ教が生み出した古典がタルムードその他で、これを専門とされるのが、市川裕さんです。そして初期キリスト教の生み出した古典が新約聖書で、この専門家が佐藤研さんです。この三名が、イスラエル学分野の計画研究代表者ということになります。以下、お二人の専門領域については、お二人から教えていただいたことを私なりにまとめて、ご報告いたします。

さてイスラエル宗教の最も根本的な古典が、旧約聖書ですが、それがどのような過程を経て成立したかを解明し、いかなる意味を伝えているかを規定することが、旧約研究の基本となります。その中でも個々の文書の、遡源しうる限りの最古の姿の確認作業は本文批評と言われ、基盤的重要性を持ちます。その点で、死海写本が紀元前後の時代のヘブライ語写本を大量にもたらしたことは画期的であり、旧約本文の確定に大きく寄与しつつあります。

死海写本は、1947年以来、死海沿岸のクムラン洞穴から発見された写本群ですが、それまで知られていたマソラ本文が、紀元後10ないし11世紀のものでしたから、約千年古い読みを伝えているという意味で重要なわけですが、ただマソラ本文と、それほど本質的な異同は今のところ発見されておりません。なお死海写本は既にCD-ROM化されていますが、検索等の仕方について、まだ改善の余地はあるようです。全般に聖書本文ないしその翻訳のデジタル化はかなり進んでおりますが、その一層有効な利用法の開発が望まれるところです。その意味で、研究項目で申しますと、A03の「情報処理」にも、イスラエル学から積極的に参加できればと考えております。

新約聖書においても、本文批評は倦むことなくなされてきましたが、同時に現在では「ナグ・ハマディ文書」、とりわけその中の「トマス福音書」等の発見により、「本文批評」の問題域が一層の拡大を見せております。

新約聖書の写本は、既に二世紀の始めから多数あり、それぞれの系統についての研究も厳密になされております。「ナグ・ハマディ文書」というのは、1945年、エジプトのナグ・ハマディで発見されたコプト語の写本ですが、特にその中の外典福音書である「トマス福音書」は、

二世紀中頃の成立と思われる、正典の共観福音書のイエス語録と近いものもありますし、グノーシス精神に基づく、全く未知のものもあります。その意味で「本文批評」上、興味深いわけでは、いづれにせよ、こうした方向はA01の「原典」項目に関わるところでありましょう。

こうした本文研究において古代・中世の写本と並んで重要なのは、ギリシア語・ラテン語等々の古代語訳です。特に七十人訳と言われるギリシア語訳は、既に紀元前3世紀から始まっており、マソラ本文より千数百年古い読みを伝えている可能性があります。ただどの程度意識の傾向があるか、どの系統の写本を底本としているか、など文書によって様々で、古いから信憑性が高いとも言い切れないところに、本文批評の難しさがあります。

明治以来の伝統を誇りつつ、近年斬新な新訳によって新たな段階を迎えている、旧新約聖書の和訳の試みこれは現在岩波書店から出されている翻訳シリーズなどを念頭に置いているわけですが、新約の方は佐藤さんが中心となられて既に完結しており、評価も高いですが、旧約の方は我々、まだ刊行途中で半分位しか出していませんので、これは主として新約のこととご理解ください。いづれにせよこれらの最近の和訳にも、こうした古代語訳の比較検討は積極的に取り入れられております。またそうした古代からの他言語への翻訳の存在は、本文とその使信が異なる文化圏へ浸透する際に、どのように受容されたか、あるいはまた変容されていったか、という、研究項目で言うとBの01・02：「伝承と受容」の問題に何らかのサンプルを提供できるかも知れません。

本文の校訂と並んで、旧新約聖書の研究は、17世紀のスピノザ等の先駆者を経て、特に19世紀から欧米のキリスト教圏を中心に歴史的批判的方法を駆使した研究として盛んになりました。いわゆる「聖書学」の興隆です。これはイスラエル宗教共同体の諸伝承が、どの時代のどういう思想に起源を持ち、誰によってどのように担われ、最終的には如何にして、モーセ五書、預言書、諸書、福音書等となって結実し、編集されたのか、という問いを、以下のような様々な方法論に基づいて研究するものです。

例えば、聖書本文は古代の多くの古典テキストと同様しばしば文書として形成される前に長い口伝伝承の段階を経ておりますが、その口伝伝承の諸段階を明らかにし、その際に働く歴史的諸要因や叙述意向について考察するのが、伝承史的研究です。この口伝の伝承史を文書の伝承史領域へ継承したものが、続いて編集史的研究となります。本文の、文書としての第一段階から、加筆による補足注釈作業を経て、現在伝えられる最終本文に至る歴史を跡付け、そこでの編集意図を問うことが、編集史の主たる任務です。その際古代の作者・編集者は、

彼らが生きていた集団の固有の「生活の座 (Sitz im Leben)」に伝えられる文学類型にのっとって語りまた書いた、というのが、様式史的な視点です。様式史は自らの視点の妥当性を証明するために、出来る限り広汎に種々の本文を比較渉猟し、そこに共通する類型の収集と、そこに想定される有効な生活の座の確定をしなければなりません。

例えば、秋の収穫祭の後の結婚の祝いに生活の座を持つ、王の婚礼歌 (詩篇45) とか雅歌といった類型の存在が推測され、また戦争に生活の座を持つ、勝利の感謝の歌 (出15: 21)、勇者への誉め歌 (サム上18: 7) 等々の類型が想定されます。様式史は詩篇や雅歌がこういう類型に則って書かれているのだ、という仮説を固めていかなばならないわけですが、この仮説は本文から抽出されるものであり、その仮説を逆に本文に当てはめて本文を解釈するという、そういう循環がここには残ります。しかもそういう類型をはみ出して語るところにこそ、独創的な心情も吐露されているとすると、こういった類型論は却って解釈を平板化するものではないか、といった疑念は残るのですが、いづれにせよ、こうした様式史を是認すると否とにかかわらず、本文の作者・編集者、さらには後代の伝承者・改竄者等が、それぞれの時代と場所の精神的・思想的環境を陰に陽に前提としていることは、確かでありましょう。彼らが前提とした、そうした環境を伝統と総称し、彼らがどういう伝統を精神的環境とし、語の固有の場を踏まえて、本文を形成していったか、それを研究するのが、伝統史的研究に他なりません。先の伝承史はドイツ語で申しますと、Ueberlieferungsgeschichte、伝統史がTraditionsgeschichteにあたります。こうした様々な解釈学の方法論を統合的に駆使して、聖書本文の歴史的意味規定としての解釈に至ること、それが、歴史的批判的聖書学の最終的な目標となります。以上は、主としてA02の「本文批評と解釈」で扱われるはずの問題領域となりましょう。今日ではそれらを土台に、様々な隣接分野例えば、社会学、文芸学、考古学、言語学等々にもまで研究が波及し、止まるところを知らない研究活動の盛況が見られ、日本の研究も、この分野においては国際的に高い水準を示していると言ってよろしいかと思えます。しかしそれぞれの方法論をより精緻に磨き上げ、またその本文解釈への実際の適用の成果を積み重ねて行くこと、さらには、各方法論の相互の関連性について反省することなどが、常に課題となり続けるはずでございましょう。

さてイスラエル宗教における聖典形成と解釈の活動は、旧新約聖書の確定で終わることなく、さらに発展を続けました。紀元1世紀末70年のローマ皇帝ティトゥス

による、第二神殿破壊 以降のラビ的ユダヤ教は、聖書の啓示を基礎にして社会形成を行ったために、その聖書伝統の形成は広範囲に及びました。それは以下の三つの領域に大別されます。一つは法規範の領域です。口伝律法の集成であるミシュナーと、その注釈であるゲマラー、両者を合わせたタルムード、更には中世のユダヤ法典類が、この第一の領域に入ります。第二には狭義の聖書解釈、即ち古代のシナゴグにおける聖書講解集であるミドラシュや、中世の多くの注解書があります。そして第三に、カバラーと呼ばれる密教や、その流れを汲むハスイディムなどの哲学・神秘主義の著述があるわけです。

これらに対する学問的研究は、19世紀のドイツで、改革を目指すユダヤ人学者が「ユダヤ学」を成立させたことによって飛躍的に発展し、今世紀にはその伝統を継いで、特にイスラエルと合衆国において研究の進展が顕著です。ユダヤ人による研究が抜きんできて、日本人による国際的研究はまだ殆どありませんが、現在、市川さんたちによってタルムードの和訳が進められており、それを踏まえた多面的な研究が今後の課題となろうかと思われれます。

このようにしてイスラエル宗教の全貌が、旧新約聖書、タルムード等それぞれの分野の研究の積み重ねのうちに、徐々にではあれ解明されてきたのが、イスラエル学の歴史と現状です。それを踏まえた今回の共同研究の課題として、将来の展望を箇条書きにして、結びに代えさせていただきますと存じます。

第(1)に、イスラエル学の各分野においてこうした方向をさらに先へと進めるとともに、

第(2)に、分野相互の情報交換を活発にしイスラエル宗教の総合的な把握を目指すこと、が基本的な課題となりましょう。なお特にイスラエル「宗教」と限定いたしましたのは、イスラエルにおいて、人々の意識の中心にあったものは常に宗教だったからです。従いまして、そこにおける古典を考える場合も、宗教を中心に考察されねばならないという点が、イスラエル学の、良い意味でも悪い意味でも、一つの特色ではあるかと思えます。

さて第(3)の課題として、今までの方向を相互に批判的に反省し、新たな方法論をも模索すること、

また第(4)に、この人類の宝の一つである古典と日本文化との出会いの可能性も探ることが、挙げられましょう。

中谷先生が、日本人による日本人のための古典研究ということをかねてから主張しておられ、大いに賛成なのですが、従来の歴史的批判的解釈学が標榜したように、単に無国籍・匿名の解釈者が、ひたすら無となって客観

的にテキストをして語らしめれば済むとも、そのことが厳密な意味で可能だとも考えない、例えばガダマーやリクールの哲学的解釈学の方法が従来の方法に補足される必要があるのではないのでしょうか。この点は今これ以上立ち入る時間はありませんが、明日のパネル・ディスカッションや、来年度の総括班シンポジウムなどで、もう少し議論しあえればと存じます。さて最後に後二つ課題を確認して終わりといたします。

第(5)の点ですが、イスラエル学をめぐる日本からの何らかの国際的な発信の基地を築くこと、

そして第(6)に、なにかなくイスラム、西洋等、近接領域を始めとする諸研究分野の文献学・解釈学の成果との交流を通じて、共に新たな知見を開く縁とすること、などが考えられようかと思えます。

(5)については、例えば佐藤さんや私が属しております聖書学研究所が四半世紀前から欧文の聖書学論集を出して、国際的な発信に努めているといったことはございますが、こうした大規模なプロジェクトで国際学会を開催したり、より積極的に海外の大学とのネットワークを広げて行ったり、出来ればと存じます。また(6)については、今回のような全体のシンポジウムや各調整班ごとの研究会などが、専門に閉じ籠り気味だった私のような者の視野も予想以上に開いてくれる。そのことを殆ど望外の幸せと、心楽しく感じております。

以上、こうした諸点が、今回の共同研究に際し、イスラエル学の分野が課題として考え、あるいは一部すでに遂行されつつある課題として感じているところでございます。